慶應義塾大学医学部と北里柴三郎

慶應義塾大学に現在の医学部が設けられたのは、創設者・福沢諭吉の死から 16 年後の大正 6(1917)年に医学科が開設されたことから始まりました。

福沢は大阪の蘭学者・緒方洪庵の適塾で長与専齋とともに学ぶなど、少年時代から医学に対して強い関心を寄せていました。そのため、明治 6(1873)年にはすでに慶應義塾にイギリス医学を模範とした医学所を開設し、英語による医学教育を開始します。一方、明治政府はドイツ語による医学教育を推進しました。そのため、慶應義塾医学所で英語によるイギリス医学を学んでも、ドイツ語医学用語を用いたドイツ医学に基づく技術試験に合格する事は容易ではありませんでした。そうした理由から、慶應義塾医学所は当初の予想より生徒が集まらず、また医療機器が高価なことなども影響して、明治 13(1880)年 6 月に経営上の理由からやむなく閉鎖したのです。

慶應義塾大学医学部　予防医学教室
【提供】学校法人北里研究所
北里柴三郎記念室

しかし、福沢の医学への情熱は潰えることなく形を変えて、気鋭の細菌学者・北里柴三郎への協力と援助という方向に向かっていきます。福沢は、ドイツから帰国して孤立していた北里のために私財を投じて伝染病研究所を創設し、日本で初めての結核専門病院・土筆ヶ岡養生園の開設のための援助も惜しみませんでした。福沢の志の高さと深い温情に強く感じ入った北里は、福沢の死後もその遺志を受け継ぎ、慶應義塾大学の医学教育の発展のために心血を注ぎます。大正 6(1917)年には、要請に応じて、創立 60 周年記念事業として医学科の創設に尽力し、初代医学科長を務めました。大正 9(1920)年には、北里が学部長に就任して、医学部が発足します。この医学部を第一歩として、福沢が熱望していた慶応義塾大学における自然科学教育は大きく花開いていきました。

このように、慶應義塾大学の発展に多大なる貢献を果たした北里でしたが、「恩師の福沢先生の御恩に報いるため」と言って、大学からの報酬を一切受け取れないようにしていました。北里は、福沢への恩義を生涯忘れることがなかったのです。

そんな北里の情熱は、今日でも大学医学部・大学病院に息づいています。信濃町メディアセンターの建物は「北里記念医学図書館」として北里の名が刻まれており、後進達の学びを支え続けています。

日本医師会館
【提供】学校法人北里研究所
北里柴三郎記念室

福沢の想いを背負った北里の歩みは絶えることなく、常に日本医学界の先頭を進んでいきました。大正 2(1913)年に北里の提唱のもと設立された日本結核予防協会は、大正 12(1923)年には財団法人となり、渋沢栄一を会頭に迎えて、北里は理事長となります。恩賜財団済生会芝病院の初代院長として就任したのは大正 4(1915)年で、北里は院長を 8 年間務めると、辞任後も医療主管として活躍しました。また、北里の晩年の功績として欠かせないのが、日本医師会の創設と、初代会長への就任です。国内の医師会統一のため、医師達のまとめ役を嘱望された北里は、大正 12(1923)年に国会で医師会令の法案が成立すると、同年、日本医師会の初代会長に就任しました。現在まで続く日本医師会の礎を築いた北里は、その生涯をかけて組織の整備・運営に尽力しました。　慶應義塾大学の創立と発展は、日本の近代医学の進歩のために身を投じた、福沢と北里の信頼の証でもあるのです。